



発熱で整形外科を受診？

そうなんです！！小児科を受診したけれど発熱の原因が不明の場合は、関節や骨にも目を向けてください。



発熱を伴う整形外科疾患には以下の病気があります

- #1 化膿性関節炎・骨髄炎
- #2 若年性関節リウマチ
- #3 悪性腫瘍(骨肉腫やユーイング肉腫)



化膿性関節炎

化膿性関節炎は全ての関節に起こりえます。

原因は関節内での細菌の増殖です。風邪・中耳炎の治療後生き残った細菌が関節内に入り込んだり、またはアトピー性皮膚炎で皮膚に傷がある場合細菌が傷から直接体内に入ることが考えられます。

症状は関節が赤く腫れ、熱く動かすと機嫌が悪くなります。乳児の股の関節炎ではオムツ交換時に機嫌が悪くなります。幼児の膝関節炎では歩行時に足を引きずるようになります。

診断はレントゲン・エコー・CT・MRIで行います。

治療は緊急手術で関節を切開し洗浄し抗生剤の点滴を開始します。感染が落ち着けば抗生物質は内服に変更し約3ヶ月間内服します。その後、定期的に骨の成長を確認していきます。



化膿性肩関節炎



骨髄炎

骨髄炎は関節ではなく全身の骨に起こりえます。

原因は骨髄(骨の内)での細菌の増殖です。感染経路は化膿性関節炎と同じと考えられます。

症状はある特定の部分を痛み、その部分を押しえると痛みを訴えます。進行するとその部分は赤く腫れ熱くなります。

診断はレントゲン・CT・MRIで行います。

治療は緊急手術で病巣の骨髄を掻き出し洗浄し抗生剤治療を行います。状態が安定しても再発の有無、骨の成長を定期的に確認していきます。



若年性関節リウマチ

原因不明の関節炎で微熱が持続したり、弛張熱(一日の体温の変動が1℃以上を越える)を認めます。

症状は特に起床時の関節痛や機嫌の悪さで、病状が進行すると関節の動きに制限が出現します。診断は採血・レントゲン・MRIで行います。治療は内服薬で関節炎をコントロールします。



悪性腫瘍 (骨肉腫・ユーイング肉腫など)

悪性腫瘍でも微熱を認めることがあります。

悪性骨腫瘍のなかで頻度の高い骨肉腫は15才前後に好発し主に膝周囲の痛みを訴えます。診断はレントゲン・CT・MRI・採血で行います。治療は外科的治療と化学療法を行います。



化膿性足関節炎

関節内の膿

発熱の原因が不明の場合
整形外科も受診して
ください！